# BLAZBLUE～七人目の六英雄～

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＡＺＢＬＵＥ～七人目の六英雄～

【Ｎコード】
Ｎ３３０６Ｐ

【作者名】
蜘蛛の血

【あらすじ】
暗黒大戦を終戦に導いた六人の戦士、六英雄。
この六英雄には知られざる七人目がいた。
七人目の目的とは・・・・

# prologue（前書き）

ちょっと思いついただけです。
どうぞ

# prologue

第十三階層都市カグツチの麓に今、前代未聞の来訪者が現る。
「此処が第十三階層としカグツチか」
（第十三ってことは、確かν（ニュー）だったね。）
（結局精錬に失敗するんだろうけどね。）
（だが、あいつは面白いと思うぞ。今までの中で最も意志を強く持ってるらしい。）
（それだけ進化したものの失敗作があの黒き獣とは思えないね。）
「それはそうだ。基本的に失敗しないあいつが失敗したんだ。どうなるかは未知数だ。」
何もかもをさとったような会話をたった一人でしている謎の人物。
この人物はだれにも知られることなく暗黒大戦、もとい第一次魔素大戦で六英雄に手を貸し、終戦に導いた人物である。
「さて、とりあえずは、行方不明の第十二素体μ（ミュー）を回収して、あいつの野望を止めるぞ。」
『了解』

数日後・・・・
数日前、カグツチに来た彼は、今とある店にて食事中である。
「なかなか接触が無いよ。」
（仕方が無いさ。此処、カグツチとて階層都市だ。其れなりに広いだろう。）
「それもそうだよね。」
また一人で何かをしゃべっている。
「ねぇねぇ、何一人でしゃべってるの？」
「え？あぁ、すいません。少し考え事をしていました。」
「それにしてもすごいよねぇ。士官学校の入学テストを受けただけ

なのにいきなり諜報部だなんて。」
「いえいえ、マコト先輩ほどじゃありませんよ。マコト先輩は術式適性も高いですし、実戦経験も豊富で。」
説明せねばなるまい。彼は自分のある目的のための捜査網を広げるために世界虚空情報統制機構の統制機構員になったのだ。その際に受けるテストで半端ない術式的性と戦闘能力。学力を買われ、超とび級をしたわけだ。そこで配属されたのが諜報部。因みに准尉である。
「えへへ～そうかな～。」
彼女はマコト＝ナナヤ。
リス系亜人種の少女で世界虚空情報統制機構諜報部の少尉であり諜報官。
彼の先輩に当たる。
（随分と扱いやすい人だ。）
「そんなこと言わないの。」
「ん？どったの？」
「いえいえ、何も。」
他人から見れば、一人で会話をしているところは不思議であろう。
「ま、今日は私のおごりだから。じゃんじゃん食べちゃって！」
「はい、いただきます！」
（食ってる場合かよ。）
（全くね。）

数分後・・
「ふぅー、喰った喰ったー。」
二人ともその身体の何処に入ったと言わんばかりの量を食べた。
「マコト先輩・・・・」
「ん？」
「公衆の面前です。もう少ししっかり女らしくしてくださいよ。」

「まわりなんて気にしないの！気にしすぎてたら自分に嘘つきそうだから。」
「マコト先輩らしいですね。」
「でしょ☆」
「・・・・」
「そんじゃ、そろそろ本部にもどろっか。」
「はい。」
（んー♪後輩がいるって良いねぇ。カルルくん以来かな。しっかり後輩と接したの。
士官学校じゃ学年ごとに隔離されていたからねぇ。）
「マコト先輩？」
「ん？」
「本部はあっちですよ。」
「アレ？そうだっけ？」
「そうですよ。どうしたんですか？」
「えっと～これは、アレだよアレ。ほらほら、君ってまだカグツチに来てそんなに経ってないからさ。案内してあげようかなーって。」
「そうですか。」

数時間後。
「大体こんなとこかな？」
（カットしたな。）
（カットしたわね。）
大体の案内をしてもらい、本部に戻った。
「有難うございます。」
「いやいや～、お安い御用だよ。」
「では、本部に戻るとしましょう。」
「そだね。」

## prologue（後書き）

マコトってこんな感じでしたっけ？
そんなことよりも、更新はそんなに早くありません。
それでは

## オリキャラ紹介　（性格編）（前書き）

よくわかってないと思いますが、一応。

## オリキャラ紹介　（性格編）

ギニョール
全ての人格の入ったからだの持ち主。
おっとりとした女性でありながら英雄の名に恥じない分析力や戦闘能力を持つ。
α（アルファ）からω（オメガ）までの二十四の人格を所有しているが、暗黒対戦の影響で、幾つも崩れている。
アークエネミーの一つである造魂永鵺（ぞうこん えいや）をもつ。
永鵺は、人格を作ったり消失させたりする。本人以外の人格はこれによって作られた。
ドライブ技
ペルソナチェンジ
人格を入れ替える。
人格が変わることで、全く違う戦い方をして相手を翻弄する。
一つの人格につき、制限時間はある。

アーラ＝ギニョール（α（アルファ））
統制機構員として表に出ている女性の人格。
多少幼いがしっかり者である程度の相手は敬語で話す。
仕事はバッチリこなす。
戦闘スタイル
円盤を使って遠距離からの攻撃を得意とする。

ベルフ＝ギニョール（β（ベータ））
カグツチに来た際に表に出ていた男性の人格。
多少ずれていながらも、物事をしっかり見て対処する。
ギニョール内でのまとめ役。
戦闘スタイル

相手に背を向けて、体を反りかえして戦う。いわゆるザッパである。

オルス＝ギニョール（ｏ（オミクロン））
普段は、表に出ない男の子。
気弱だが正義感が強く、常に物事を冷静に考えて、最善の手をギニョール内で指揮する。
戦闘スタイル
体からワイヤーを放ち、超遠距離で戦うほか、後ろに飛び道具を出すと、相手の後ろから飛んでくるなど、トリッキーな戦い方をする。

ウェイズ＝ギニョール（ω（オメガ））
普段は眠っている女性の人格。
正確には何をしでかすかわからないので眠らされている。
ギニョール内では最強。
遅い飛び道具で相手の動きを封じてからのインファイトを得意とする。
攻撃力は非常に高い。

## オリキャラ紹介　（性格編）（後書き）

誰がどれだかよくわからないと思いますが、次回から名前を入れていきます。

## 任務は下水道にて（前書き）

なんか続いています。
どうぞ

## 任務は下水道にて

カグツチの案内を終えて、統制機構カグツチ支部に戻ってきた二人。任務の確認に入る。
「えっと、今回の任務はっと・・・・なんでこんなんばっかかなぁ？」
α「ちょっと見せてください。えっと、カグツチ最下層の下水道にてラグナ＝ザ＝ブラッドエッジを待ち伏せ、戦闘をしデータを収集すると。」
o（戦闘ならまかせてよ。どんな奴でも倒してやる。）
α「あのね、あんたの戦い方は気持ち悪いし、こっちも体痛いから出したくないの。」
オルスはものすごくひどい戦い方をするらしい。
o（だったら僕の体に交換すればいいじゃん。）
α「はぁ、いくら術式が発達してきたこの時代でも、無条件でいきなり体が変わったらおかしいでしょ？だから、私の体のまま戦わなくちゃいけないの。」
β（俺も？）
α「もち。」
仕方がないことだが全員アーラの体で戦うはめになる。
「・・・・ねぇ、大丈夫？」
またひとりで喋っているアーラにマコトが話しかける。
α「ふぇ？」
「何か君さ、よく一人で喋るよね。もしかして何か隠してる？」
α「そ、そんなことありませんよ。私が先輩に隠していることなんて何も。」
そんなことよりも、早く最下層に行って任務に取り掛からないと。」
強引に話を任務に戻す。
「んー、それもそうだね。それじゃ、出発！」

任務のために、カグツチ最下層の下水道へ・・・・

最下層

「うわ～、相変わらず汚れてるねぇ。尻尾が汚れたら最悪だよ。」

下水道というだけ汚れていて臭い。その上、ごみが大量に捨てられている。統制機構が見られてはいけないようなものを捨てているとかいないとか。

α「いつ詰まってもおかしくないですよね？」

「んー、まぁ、今は関係ないし良んじゃない？」

β（相変わらず、天真爛漫だな。）

とりあえずラグナ＝ザ＝ブラッドエッジが来るまでひたすら待つ。

一時間後

「来ないよ～。あの情報は嘘だったのかなぁ？」

マコトは待つのが苦手らしい。

o（性格からして当然といえば当然かな？）

α「いやいや、まだ一時間しかたってませんよ？」

「一時間も待たせていれば大遅刻だよ。」

α「それもそうですが、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジは統制機構支部をつぶしていってるんです。どんなに遅くてもここには来るはずですよ。」

ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジはどういうわけか統制機構の支部をひたすらつぶしているらしい。その影響か、最近は指名手配犯を咎追に任せてそちらのほうに手を回しているほどだ。

「そりゃそうだけどさ～。いくら重犯罪者ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジでも遅刻はよくないと思うよ。」

α「まぁ、そうですね。」

遅刻云々を話していると、何やらおかしな気配を感じる。

β（おいアーラ、気付いてるよな。）

α「もちろん。何かに見られているような感じがする。」

「ん？どったの？」
どうやら、マコトは気づいていない様子。どうやら、野生の勘は今回発揮されていないらしい。
α「マコト先輩気づいてないんですか？」
「ん？何に？」
ο（だめだこの人。）
α「とにかく、何かいます。注意してください。」
「・・・・わかった。」
β（俺らも準備するぞ）
ο（了解）
ベルフとオルスは表に出ていなくても臨戦態勢に入る。
「・・・・なんも来ないじゃん。」
だが、一向に何も来ない。だが、気配だけはする。
α「でも、何かいることは確かです。人間といえば人間のような気配ですが、違うといえば違う気配。」
「どういうこと？」
α「元人間、もしくは、人間を取り込んだ何かかと。」
「なるほどねぇ。」
ω（魔素の塊。）
α「えっ？」
β（なんだってウェイズ？）
ウェイズが急にしゃべり始めた。
ω（元人間、魔道を探求しすぎ。）
「どうしたの？」
α「人間であり人間でないようです。しかも相手は魔素の塊らしいです。」
「魔素の塊？それって、黒き獣？」
α「わかりません。でも、何が来てもいい状態にしておいてください。」
「了解！」

マコトは、黒いローブと帽子を脱ぎ捨て、臨戦態勢に入る。
α「では、私も。」
アーラもローブと帽子を脱いで、動きやすくする。
o（にしても、マコトさんの戦闘服って・・・・）
α「なんで、こんなのなんでしょう？」
マコトの戦闘服は、胸元と腰元を隠し、グローブをしているという。どう見ても防御に難ありの服装である。
「そういうアーラちゃんも人のこと言えないじゃん。」
α「ま、まぁ。」
アーラの場合は、士官学校の制服を上の丈を短くして黒く諜報部風にしたようなものである。
そのほか、袖がなかったりニーソだったり。
ちなみにこのデザインは、ベルフに断固拒否されたが、ギニョール本人がほとんどアーラが活動するからアーラに決めさせるという方向でこうなった。
β（俺絶対ローブ脱がねぇ。）
o（僕は問題ないけどね。）
β（いやいやｗｗ）
アーラが気を張っているというのに話し始める二人。閑話休題（それはさておき）徐々に気配が強くなる。
「確かに何かいるね。よくわかんないのが。」
α「今さらですか。」
やっとマコトが気配に築いたその時。
「キヒャヒャヒャヒャ！」

## 任務は下水道にて（後書き）

何が来たかはお分かりですね。
それえは

## 下水道の王蟲（前書き）

初めての戦闘です。
どうぞ

## 下水道の王蟲

「ケヒャヒャヒャヒャヒャ！」
急襲の下段突進（２Ｃ）。
「グッ！」
ガードが遅れたものの、何とか立て直す。
α「マコト先輩！この野郎！スライサー！」
円盤を数枚投げつける。
「ワレ、此処ケヒャヒャヒャ！」
α「よけられた。」
急襲を仕掛けてきたのは黒い体（？）に白く三筆かける顔をした生き物である。
o（黒き獣といえばそうなんだけど。）
β（なんか違うよな。大きさ的に見ても力的に見ても。）
α「元人間だからね。慣れるのにも限界があったんだよ。」
β（なるほどね。）
「やったなー！コロナアッパー！」
急接近しながらの強力なアッパーで一気に間を詰めながら攻撃する。
「何も繋がらない！」
軟体質の体には大きな効果がないのか、受け切られた。
「食べてしまいたい！」
「なっ！」
受け切って止まったところを包み込んだ。
α「た、食べた！」
「ぷっ！」
包み込んだ後に真上に吐き出した。吐き出されたマコトは気絶しており、身動きが取れそうにない。
「蟲よ高まれ！」
身動きの取れないマコトに対して容赦ないレーザー。

o（変わって！アーラ！）
α「ＯＫ！ペルソナチェンジ！オミクロン！」
o「よし！キャッチワイヤー！」
手首が外れ、ワイヤーで腕を伸ばす。その伸ばした手の先は、マコトであり引き寄せる。
「うぅ、な、何とかとか生きてるか。まさか食べられちゃうとはねぇ。」
o「気楽過ぎだよ。」
「ごめんごめん。でも、あいつに打撃は通用しないんだ。どうすればいいの？」
o「僕に任せて。あのくらいならなんとかなるから。」
「僕？」
いきなり性格と口調だけ変わったアーラ基オルスに疑問を持つもスルー。
「キサ　そ　アーク　ネミー　？　がう　アー　エネ　は　部で九」
o「流石に詳しいね。でも、これはアークエネミーといえばアークエネミーだけどちょっと違うんだよ。ナインが作る前にギニョールが頑張って作ったやつだから。」
「アークエネミー？」
o「ちょっと言い過ぎたかな？大丈夫、殺しはしないから。スチームパンチ！」
「メポアァ！」
腕が一瞬で黒い生き物に命中している。その腕からは煙が上がっており、黒い生き物にも十分なダメージを与えている。
α（さすがオルスだね、でも腕はちゃんと戻してほしいかな。）
β（そりゃそうさ。一応俺等の中では弱い方といえどギニョールの一員だ。あのくらいやってもらいたい。）
（ま、全員私が作ったんですけどね。）
α（ギニョール・・あんたいつからいたの。）

（ロット＝カーマイン、アラクネっていったほうがわかりやすいかな？あいつが来てからですよ。）
元人間ロット＝カーマイン現在はアラクネという通り名で指名手配されている。
「すご～。やっぱ超とび級は伊達じゃないね。」
ｏ「キャッチワイヤー！」
今度は、回収するわけではなく、自分から近づく。
ｏ「Ａ、Ｂ、６Ａ、ＪＢ、ＪＢ、ＪＣ、２ＪＣ、スチームパンチ！」
指を伸ばして相手をひるませ、ひじ打ちで前のめりにし、四本の指で打ち上げ、飛び上がりけりを二発、両足かかと落としから急降下回転かかと落とし、最後に腕を飛ばす。
「無駄の極致。」
ｏ「さすが流動体。」
たたきつけられてもぬるぬると立て直す。
「ってか、アタシの出番！」
α（私も！）
ｏ「あ、ごめんなさい。ペルソナチェンジ！アルファ！」
α「やっと戻ってこれた。うー、体が痛い。」
β「お疲れ。」
ｏ（ちょっと暴れすぎちゃったかな。）
「じゃ、いっくよー！コメットキャノン！吹き飛べー！」
エネルギー体を殴り飛ばすマコト。
α「リフレクトスライサー！」
円盤を地面やら天井やらで反射させるアーラ。
「そこを左へ！」
α「！」
「何っ！？」
地面から黄色い突起物が生えて攻撃を加えてきた。
「召喚！」
「霧？」

アラクネの体内から赤い霧を発生させる。
α「気を付けてください。毒ガスかもしれません。」
「OK」
霧を警戒しつつ接近する。
α「3C！」
射程範囲内に入って下段に術式で巨大化させた円盤を回転させながら入れ込む。
「ギヒィィ！」
地面の体を切り離して体勢を崩させる。
「ステップイン！」
体勢の崩れたアラクネに対して上から殴る。
「アアアアァァァァ！」
縮こまったかと思うと体が爆ぜた。
α「障壁解放ですか。」
「距離を取られる！」
マコトの言う通り、アラクネの目的は距離を離すことである。
「ア゛ア゛・・・ア゛・・・」
「な、なに？」
o（ずいぶん不安定だね。）
β（あぁ、元人間だし自我も崩壊している。）
「急がないと追ってくる・・・・・」
何を言ったかと思うと地面に溶けて行った。

「なんだったんだろうね。」
α「さぁ？」
β（何か力にひかれたみたいだな。）
o（たぶんね。）

## 下水道の王蟲（後書き）

タイトルの由来は、下水道はアラクネステージ。
王蟲はジブリより。
アラクネがカオナシみたいだから何となくやってみたかっただけです。
それでは

## 本任務（前書き）

やっとラグナ君が出てきます。
どうぞ

## 本任務

アラクネを追い返して、任務である張り込みに戻るマコトとアーラ。
β（あいつはどこに行ったんだ？）
o（あいつ？）
β（ロット＝カーマインだよ。何かにひかれたように見えたが。）
o（さぁ？でもひかれたというよりも半分は僕たちの力を見て興味を覚えたってとこかな？）
β（そうか。）
中でアラクネについて雑談中。
α「うるさいよ！」
それに対して活を入れる。
「！」
だが、それははたから見たら急に叫んだようにしか見えない。
「な、何かあったの？」
α「いえ、ちょっと虫が耳元を飛んでいて。」
「そ、そうなんだ。」
驚きと呆れを混ぜた表情を見せるマコト。
α「ちょっとは考えてほしいよ。」
β（悪い悪い。）
o（ごめんなさい。）
一人で体内の二人を叱るアーラ。
だが、マコトもさすがに慣れてくる。
「ところでさ、アーラちゃん。」
α「はい？」
「なんで、あんな戦闘服にしたの？」
α「あー、あれですか。ただ単に統制機構から買うのが面倒だったのと、あの制服、気に入ってたんですよ。」
「あー、そうなんだ。確かに士官学校の制服ってかわいいからね。

アーラちゃんは、物を大切にするタイプだね。」
α「まぁ、一応使えるものは使い続けるほうなので。」
「いいことだと思うよ、うん。」
α「じゃあ、マコト先輩はなんであんな露出の多い戦闘服にしたんですか？」
「露出多い言うな。まぁ、私ってリス系亜人種だからさ。普通の服だと尻尾が邪魔になるからさ、丈が短くて尻尾のとこに布が来ないこの制服がいちばん良かったってわけ。」
α「それって、士官学校の時どうしてたんですか？」
「ん？どゆこと？」
α「士官学校の制服って、改造禁止ですし、全部普通の人間用に作られているじゃないですか。」
「まぁ、そうだね。」
α「普通に使ってたら尻尾でスカートめくれません？」
「あー、それなら問題ないよ。アタシはスカートに穴をあけておいたからそこから尻尾が出るってわけ。」
α「なるほど。でも、違反ですよね。」
「大丈夫大丈夫、亜人種の人たちは自分に合わせていいようになっていたから。」
α「そうだったんですか？」
「そうだったんだよ。質問続きで悪いけどさ。」
α「はい？」
「さっき戦ってたときに腕伸びたりしゃべり方とか声とかかわったりしたじゃん。」
α「え、ええ。」
「それってどうやったの？」
α「（やっぱ出すんじゃなかったよ。）えっとですね。腕が飛んだのは術式の応用で、口調とかはその戦いになるとハイになるっていうかなんというか。」
「なるほどねぇ。戦闘になると人格変わっちゃうんだ。」

α「ギクッ！」
β（ば、ばれてねぇか？）
o（大丈夫だよ。そんなはずはない。）
「ハザマ大尉も時々なるんだよねぇ。普通はあんなつかみどころない人だけど戦ってるとたまに「ヒャッハー！」とか「死ね死ね死ね死ね！」とか叫ぶからさ。」
α「そ、そうなんですか。」
o（ふぅ、よかったー。）
β（とりあえずセーフだな。）
「まさか、アーラちゃんもそっちタイプだったとはねぇ。」
α「まぁ、どっちかわかりませんがそういうことです。
後それとちゃん付けはやめてくれますか？なんか、くすぐったいっていうか、苦手で。」
「そうなの、じゃあ普通に呼び捨てでいいかな？」
α「そうしてください。」
「じゃ、そっちもあんまり固くならないで、普通にゆるーく付き合おうよ。諜報部って階級気にしないから。」
α「そ、そうですか。でも、一応先輩ですし。」
「まぁ、そうすぐじゃなくていいって。」
β（なんか、見る目変わるよな。）
o（ルックスが？）
β（いやいや、空気がだよ。今まではただ単にフレンドリーな人としか見ていなかったが、なんだかんだで気を使ってるんだなって。）
o（まぁ、そうだね。）
ギニョール内でのマコトの見方が変わってきた。
閑話休題（それはさておき）、今やっとこのカグツチ最下層の下水道に死神と名高い賞金首がやってきた。
「！、来たね。」
α「やっとですね。どんな人なんでしょう。」
「この手配所を見る限りじゃ、相当な悪党面なんじゃない？」

α「どうでしょうね？」
そこにいたのは銀髪のツンツンヘアーに赤いジャケット、袴のようなズボンをはいた男がやってきた。
「あいつがラグナ＝ザ＝ブラッドエッジかな？」
α「だと思いますよ。顔はどうあれ、銀髪のツンツンヘアーに緑と赤のオッドアイ、赤いジャケットと、とりあえず特徴は一致しています。」
「でも、手配所と顔違うよ。」
α「そこは同感です。」
そんな事を話していると、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジは急に立ち止まってあたりを見渡す。
「どこも似たようなつくりだな。一番下が下水道で、下層、上層、ほんで統制機構があるってとこか。」
どうやら、統制機構をつぶしているという情報は本当らしい。
一部の人間は、統制機構を図書館と呼び、あまりいい見方をしていない者もいるが、それは置いておこう。
「ま、上に歩いていけば付くし・・・・・・ん？」
一瞬の身震い。
「な、なんだ？」
彼の前に一瞬黒いぼろ布のようなものが現れた。
（幽霊は反則だ。ぶった切ってもぶった切っても無駄だ。そんなもんに俺は関わりたくない。）
どうやら幽霊が苦手なご様子。
（しかし奴はどうも幽霊とは違う見てぇだな。こんな“力”もった幽霊がいたらおれは真っ先に逃げる。）
だが、彼が見たものは幽霊ではない。
「薄気味悪い動きしやがって、まったく。テメェ・・・・境界から力を取り入れているな。」
「貴様か　蒼　蒼　色　じる　」
「なれの果てってやつか。」

「あ、アラクネ！？」
α「マコト先輩、静かに・・」
「あ、ごめんごめん。」
そこに現れたのはアラクネであり、ラグナはアラクネの姿から経緯を察した。
「蒼！蒼！蒼！　し　！！狂わ　　欲　る！！ケヒャヒャヒャヒャヒャ！」
「馬鹿だなテメェは・・・・・あんなもんに手ぇ出しやがって。」
アラクネに対し、憐みの表情を見せるラグナ。
だが、それはアラクネに対しては無意味なことであった。
「そ　奪　！必　！」
「ま、こうなるわな。そのなりには同情するが・・・・」
そう呟き、臨戦体勢に入る。
「俺の邪魔すんじゃねぇ！」

## 本任務（後書き）

後半、アーラとマコトの出番が少なかったです。
次回は、ラグナの戦闘だと思います。
それでは

## ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジＶＳロット＝カーマイン（アラクネ）（前書き）

はい、ラグナＶＳアラクネです。
どうぞ

**ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジＶＳロット＝カーマイン（アラクネ）**

ＴＨＥ　ＷＨＥＥＬ

ＯＦ

ＦＡ

ＴＥ　ＩＳ　ＴＵＲＮＩＮＧ

ＲＥＢＥＬ１

ＡＣＴＩＯＮ

「さーて、気は進まねぇが邪魔をするなら叩っ切る！」

「溶けろ！」

急襲の２Ｃ

「軽ぃなぁ。おらぁ！」

下段ガードで反確のところを２Ｄで上から突き刺す。

「キヒィ！」

「いきなり突っ込んで来るとか馬鹿じゃねぇの？」

実際に対戦で使うとワンコンボ入れられますｗｗ

「行くぞ！」

パンチ、蹴り、切りつけで構成されたＡＢＣのガトリングコンボで攻め込む。

「ヘルズ！」

怯んでいるところに突進しながら殴りかかる。

「ファング！」

さらに追加で黒いオーラをたたきつける。

「メポァァァァ！」

アラクネは軽く吹き飛ぶ。

「何も繋がらない。」
何かを悟っているように流動体の体で受け身をとる。
「ったく、手ごたえがねぇな。もう少しがっちり固まれっての。」
「す、すごい。」
α「確かに大した力ですね。」
β（だが、腕力や脚力自体は大したことない。）
α「確かに、あの蒼の魔道所がなければただの人間なんだけどね。」
アーラたちは諜報部らしく、ラグナを観察している。
マコトは実力の観察よりも動きを観察し、取り入れようとしている。
「使徒よ！」
アラクネが体を絞るようにうねらせると、前方に鐘のような形をした生き物が現れた（６Ｄ）
「それで何したいんだよ。」
よくわからないが、とりあえず警戒を解かないラグナ。
「召喚！」
今度は、空中で霧（ゼロベクトル）を放つ。まるで何かの準備をしているように。
「来ねぇんならこっちから行くぞ！」
「そこを右へ！」
「なっ！」
しびれを切らして動き出したラグナの足元に黄色い突起が現れて攻撃する（ＪＤ）
「喰らえい！」
倒れたラグナに対して、上から飛びかかる（Ｊ２Ａ）
「テメェ・・」
ラグナは後転しながら体勢を立て直し、飛びかかってくるアラクネをよける。
「蒼！蒼　力、我　こせ！」
「誰がやるかよ。これがないと俺もやばいんだよ。」
「なんで理解できるのかな？」

α「え？できると思いますよ。」
「うっそ～？」
この中でアラクネの言葉を理解できないのはマコトのみだ。

「ガントレット！」
飛び込みながらの叩きつけをする。
「キヒィ！」
体の一部を高質化させて防ぐ。
ラピッド！
「おら！」
途中で、行動をキャンセルして、足払いをする（３Ｃ）
「何を何を何を！」
「うおおぉぉおぉ！」
倒れたところに黒いオーラをまとった剣で切り上げて叩きつける（５Ｄ）
「まだ終わりじゃねぇぞ・・」
アラクネの顔を持ち、鳩尾らしきところに拳を入れる。
「あが・・が・・が・・・・」

「みぞあったんだ。」
α「らしいですね。」
魔素流動体であるアラクネにみぞがあるのかは確かに不思議である。

「ふん！」
怯んでいるアラクネに対して、アッパーを入れて浮かせる（６Ａ）
「うおぉぉ！」
浮いたところにオーラをまとった剣で回るように切りつけ（６Ｄ）
追い打ちと言わんばかりに空中で攻撃を入れていく（ＪＣ＜ｊｃ＞ＪＣ）
「ベリアルエッジ！」

アラクネの位置を見て剣を下に構えて斜めに落ちる。
「今際の言葉を！！」
アーラとマコトと戦っていた時のように爆ぜて距離をとった。
「まずい！」
「ぐぉ。」
アラクネは丸い球体を打ち出し、その球体は着地地点でとび跳ねた（２Ｄ）
「ケヒャヒャヒャヒャ！」
アラクネは急に意味不明な動きをし始めた。（ＡＢＣＤ適当）
「何やってんだ？って、ぐお！」
急にわけのわからないとこから歪な蟲が飛んできた（クリムゾン）
「チッ！初見で遅れたか。」
初めて見たのかガードが遅れた。
「ま、通じるのは初めだけだ。」
ラグナは難なくガードを固めてやり過ごす。
しばらくすると蟲は飛んでこなくなったが・・
「ん？どこに行きやがった？」
蟲が来なくなるとアラクネの姿がない（イコール０）
「ワレ、此処、ケヒャヒャヒャ！」
「どこだ？」
声はするがまったく姿が見えない。
「おとなしくしろ！」
警戒をしていると、真正面斜め上から何かに突き刺されるような痛みを受けた。
「さぁ！」
受けた瞬間に姿が見え、二撃目にひれで勝ちあげるように攻撃される。
「喰らえぇい！」
三撃目に食いつかれるように上から覆いかぶさるように攻撃される。
「見えたと思ったらこれかよ。」

見えていなかったが故、思いっきり喰らった。

「へー、アラクネってあんなこともできるんだ。」
α「とりあえず何でもありですね。」
β（ちゃんと見ろよおまえら。）
ベルフは一応しっかり見ている。

「チッ！面倒くせぇ。一気に決めてやるよ！」
ラグナは、まるで死へと導く死神のような目でアラクネに狙いをつける。
α「大技きますよ。」
「了解。」
「カーネージ！」
剣を引き抜き一気にアラクネに突っ込みながら叩きつける。
「メポアァ！」
「シザー！」

## ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジＶＳロット＝カーマイン（アラクネ）（後書き）

ちょっと中途半端ですが気にしない。
それでは

## お仕事お仕事（前書き）

戦闘後です。
どうぞ

## お仕事お仕事

「うううう　うう
蒼　蒼……欲　」
ラグナは大技でアラクネに致命傷を負わせた。
「わりぃな。
せめて苦しまずに逝かせてやるよ。」
「止めて！！」
ラグナが、アラクネにとどめを刺そうとした瞬間に女性がアラクネを庇うように割って入った。
「あぁ？
何だテメェ、邪魔だどけ！」
ラグナはどくように女性に言うが……
「この人のことは私が何とかするわ。
だからお願い！今は殺さないで……」
女性は、動く気など微塵にもないようだ。
「……この感覚……テメェもかよ。
いったいこの街はどうなってやがる。」
「お願い……」

α「あの方もですか。
ロット＝カーマインはいいけど、このままいけば……」
β（黒き獣（ヤツ）と同類（おなじ）になってしまうな。）
α「うん。」
「え、え？　どうしたの？」
ラグナとアーラたちは同じ感覚を感じた。

「あんたさ、そいつが何だか解ってる？
そうなっちまった奴はもう元には戻れないぜ。

そんなことあんたも十分承知していると思うんだが。」
理解していいると解っていても聞く。
「解ってるわ。
でも……何か、何か方法がある筈よ……」
かすかでも可能性があると信じて曲がらない。
「ったくよ、どいつもこいつも境界に手ぇ出しやがって……」
呆れたようにその場を離れるラグナ。

「あれ？　行っちゃったよ？」
α「どうします？」
「うーん、追いかけた方がいいと思う。」
α「……その必要はないようですよ。」
「ほえ？」

「あークソッ、やっぱ駄目だ！！
そいつをほっとくわけにはいかねえ。
おい、そこどけ！　でなきゃ一緒にぶった切るぞ。」
身を翻してアラクネにとどめを刺そうとするラグナ。
「どかないわ……」
アラクネをまっすぐ見て断る女性。
「アンタ。本当にそいつがどれだけ危険なシロモンかわかってんの？
もうあんたの手に負えるレヴェルじゃねーっつぅの。
マジでどかなきゃあんたも逝くはめになるぞ。」
威圧するラグナ。
「どくわけにはいかないの……。
この人に対する責任はすべて私が追うわ。
それにもう、覚悟は決めてるもの……」
頑なに断る女性。
「それに……何もわかっていないのは貴方も同じでしょ。
貴方、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジよね。

「蒼」の魔道所のこと何も知らないくせに！」
少し声を荒げて反発する女性。
「おい、テメェ……マジで殺すぞ……」
殺気を込めてつぶやくように言う。
「お願い……」
女性は真直ぐにラグナを見て頼む。
「……あーもう。
はいはい、解ったよ、解りました。
だからそんな目で見ないでくれ。
なんか俺が悪人みたいじゃねーかよ。」
真っ直ぐな眼に押されてラグナは退いた。
「あら、あなた大悪党じゃないの？」
女性は笑みを浮かべてラグナをからかった。
「はいはい、なんとでも思ってくれ。
んじゃ、俺はもう行くからな、そこのボロ雑巾、任せたぜ。
捨てるんなら燃えないゴミの日にしろよ。いや、生ごみか。」
ラグナも微笑し軽い冗談で返す。
「ラグナ……」
「あん？」
「……ありがとう、優しいのね。」
「よしてくれ……」
優しいといわれる大悪党がどこにいるだろうか。
ラグナは少し複雑な顔をした。
「んじゃ、俺は行くからな。」
ラグナは振り返らずに腕を振ってその場を後にした。

「行こうか。」
α「はい。」

「今まで何度となく見てきたな、あれに触れちまったやつのなれの

果てを。
奴らの終焉は必ず……」
あの女性が望むような結末をラグナはいまだ見たことがない。
「ま、頑張れよな……」
誰に言ってるわけでもなく呟いた。
「何言ってんだおれは……
興ざめだぜ、ったく。」
アラクネをかばっていた女性の眼が忘れられない。
「ああいう眼は苦手なんだよ。
真直ぐ過ぎて気分が悪い。
それを見逃した俺もまだまだ甘いな……
チッ、イラつくぜ……」
そんな独り言を言っている時、ラグナは気配を感じた。
「……隠れてないで出てきやがれ。」

「ちょちょ、気づかれちゃってる？　気づかれちゃってるかな？
どうしようどうしよう？」
α「静かにしてください。余計気づかれちゃいますよ。」
「……ごめん。」

「何だ、勘違いか。」
反応のなさに勘違いと思い込むラグナ。

「ふぅ、何とかなったね。」
α「落ち着いてください。それでも諜報部ですか？」
「んー、手きびしぃ。」
α「ってか私より先輩なんですからしっかりしてくださいよ。」
「う、うん。」
（な、何なんだろう？　後輩のはずなのに後輩の気がしない。
第壱話の前言撤回しよ。）

β（何だこれｗｗｗｗ）

「……やっぱりなんかいるな。」
かすかな気配に違和感を感じる。
「……そこか！」
「！」
気配を感じ切りつけたとこは「ガキンッ！」という轟音を立てて空しく響いた。

「あぁぁ…あぁ。」
ラグナの切りつけたところはマコトの前髪をかするほどの位置であった。
α「大丈夫ですか？」
「な、何とか。」
α「そろそろ仕掛けますか。」
「え？」

「チッ！　またかよ。」
イライラが募り続けるラグナであった。

## お仕事お仕事（後書き）

次回は決まってます。
それでは

## 説明（前書き）

今回は用語などの説明です。
どうぞ

## 説明

はいどうも。作者です。
α「どうしたの？」
いやいや、この作品ＢＬＡＺＢＬＵＥ～七人目の六英雄～は格ゲー用語をふんだんに使っていますね。
β「そうだな。」
でも、読者様の中には格ゲー用語が分からない方も多いはずです。
ο「まあね。」
そこで、今回はそれらを説明します。
「壱話丸々使って説明することですかね？」
活動報告では、ちょっといろいろと不備が出るかもしれないので。
「それもそうですね。」
では行きます。

７８９　　？→？
４５６⇒↑ｎ↓
１２３　　？←？

こうなります。「ｎ」はニュートラルです。
α「レバーをどこにも倒さないことですね。」
はい、次はＡＢＣＤについてです。

ＡＢＣＤとはブレイブルー特有で、Ａは弱攻撃、Ｂは中攻撃、Ｃは強攻撃のことです。
Ｄは、ブレイブルーの醍醐味ともいえるドライブ技のことです。
ドライブ技はキャラクターごとに攻撃だったり、チャージだったり、いろいろあります。
やってみないとわからないと思いますが、そこはご了承ください。

o「そこは仕方ないね。」
では、次に他の用語についてです。

コンボ→連続技です。

ｊｏｒＪ→ジャンプまたはジャンプ中のことです。

ｊｃ→ジャンプキャンセル
ヒットした場合のみで行動をキャンセルしてジャンプすること。
ジャンプＣ（ＪＣ）と間違えられることが多いので小文字で書きます。

ｈｊｃ→ハイジャンプキャンセル
ヒットした場合（ｒｙハイジャンプをすること。

ハイジャンプは、２を入力してから素早くジャンプを入力すると普通よりも高くジャンプができることです。

ｄｃ→ダッシュキャンセル
ヒットした場合（ｒｙダッシュすること。

＞→コンボの順序
右から左へボタンを順番に推すことでコンボが成立します。

安定
コンボの成功率が高いことを表します。
ほとんど失敗しない状態を安定逆に弐回に一回以上失敗する場合は不安定と言います。

大体こんな感じですね。
β「たぶんな。」
足りない場合は適当に指摘してください。
どんどん付け足していくので。
o「これを読んでどういう動きをしているとか解ってくれるとうれしいね。」
そうですね。私的にはこれを見てブレイブルーなどの格ゲーをはじめてくれる方が増えてくれるとうれしいですね。
α「それじゃ、今回はこの辺でお暇しましょう。」
β「だな。今はあの体はウェイズが使っててもし起きたら何が起こるか分からない。」
それでは～（∵）ノシ

## 説明（後書き）

これも追加した方がいいって用語がありましたらお願いします。
それでは

## 小手調べ、相棒だから（前書き）

ラグナとの戦闘と、ちょっとしたお話です。
どうぞ

## 小手調べ、相棒だから

ラグナは、切りつけたとこを少し見てから身を翻して先を急いだ。

「！」

ラグナの眼前に黒い閃光が下から上に走った。

「何だ、鼠（ネズミ）か？」

α「こんな大きな鼠がいますか？」

「な、なんだあいつ？」

アーラは、足に円盤（スライサー）を付けて、天井に張り付いている。

このアーラの行動には二つ意味がある。

まずは、地面でほふく状態でビビって動けないでいるマコトに注意をいかなくするため。

そして、もうひとつは階段（フィールド）の状況を確認するため。

α「あなた、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジですよね。

少しお手合わせ願いませんか？」

「……何が目的だ？」

α「それは自分で考えてください！」

天井から降りて、回転しながら足に付けた円盤（スライサー）で切りつける。

「っぶね！」

バックステップで何とかよける。

α「さぁさぁ、早くその剣を抜かないと傷だらけになっちゃいますよ。」
「チッ！ったくなんっだってんだ。」
ラグナは、渋々剣を抜いて臨戦態勢をとる。
α「A、B、2B、3C！」
左手の円盤（スライサー）で殴り、バックターンをしながら右の円盤（スライサー）を飛ばし、巨大化させた円盤（スライサー）で足元を打つが、ラグナはそれを軽くガードする。
「クッ！軽ぃな。」
α「さすがですね。では、そちらからどうぞ。」
「何だってんだ。」
ラグナは言われるがままに攻撃に転じた。
「ヘルズファング！」
右手にエネルギーをまとっての突進。
α「なかなか……」
「オラ！そこだ！インフェルノディバイダー！」
右足のけりからそのまま回転し、左足でかかと落とし、そこからジャンプしながら切り上げる。
α「……」
（何だこいつ、気味が悪ぃ。いったい何を考えていやがる。）

アーラはラグナの攻撃をすべてノーガードで受け切った。

o（なるほど、基本的な動きはさっきの戦闘と出していない部分を含めて、大体二十六くらいだね。
力は蒼の魔道所の本来の形を応用したもので、与えたダメージの一部が自分のものになるのか。
どうアーラ？このままいけそう？）

α「大丈夫。解析ありがとう。」
（解析？なんか観察（みる）てやがるなこいつ。）

アーラは、気をつけないと普通に声に出してしゃべってしまう悪い癖がある。
その癖を知らずとも、解析という言葉からして情報を持ってかれていることは推測できる。

「さっさと終わらせねェとな。カーネージ！」
β（大技来るな。カウンター取れるぞ。）
α「OK。フィッシュクライム！」
（何だとっ！）

アーラは高速で近づいてくるラグナに対して、鯉の滝登りのように円盤（スライサー）を回しながら上げていく、族に言う出し際に無敵のある昇竜技である。

α「この程度ですか？」
「くそが！！」
α「私もこう弱いとやる気がうせてくるんですよね。
まぁ、今のあなたはアラクネとの戦闘で体力を消耗しています、それを差し引いてもこの程度ですか。」
「何が言いたい。」

「貴方ではどう頑張ってもテルミには勝てません。」
アーラが軽く挑発して耳を向けた途端ギニョール本人外に出てくる。
「何だと！」
「ほら、そうやってすぐに感情的になって攻撃する。それが彼にとって利益の出る行為なのです。
貴方のすべきことは彼がやろうとしていることをできなくすることです。
第十三素体なんて放っておきなさい。」
「あいつを放っておけだ？ふざけんなっ！俺以外誰があれを壊すっていうんだ！」
「あそこには黒き獣を倒した張本人がいます。問題はないでしょう。
貴方は第十二素体となりうる人物を確保し、破壊するかテルミと接触させないでください。」
「しるかよ！しかもなんで、第十二素体なんだ！？」
「第十二素体は完全なる蒼を内包しています。彼がそれを手に入れれば確実に世界は崩壊の一途をたどるでしょう。
そのためにも、貴方にはほかの素体の破壊よりもそちらを優先してほしい。」
「知るかよ……そんなこと。」

一通り説明するとラグナはあっけにとられながらも吟味していた。
「テメェの言っていることは大体わかった。だが、俺の目的は世界を救うことじゃねぇ。
あいつを……テルミを倒すことだ。世界がどうなろうと知ったことじゃねぇ。」
「そうですか。」
α「やっぱ無駄だったか。」

ギニョールはある程度話すとアーラと交代した。
α「お手合わせありがとうございます。
後はどうぞ。」
「……チッ！」

アーラは本任務とギニョールの目的を果たしてラグナを送り出した。

「どうだった？」
α「それ相応の強さでしたよ。
統制機構の支部をつぶしているだけはあります。」
「そうか、そんじゃ、戻ろうか。
っと、その前に……」
α「ふぇ？」
「重犯罪者と何話してたのかな？
なんか、素体とかいろいろしゃべっていたけど。」

マコトはあくまでもその場から動けないだけであり、話の内容はしっかりと聞いていた。
α「え……えっとですね。
あれは軽く脅して蒼の魔道所のこととかを聞こうかと……」
「嘘っ！」
α「！」

マコトは嘘や偏見などにはとても敏感であった。

「なんでそんなウソつくの？相棒でしょ？私ウソとか差別とか大っ嫌いだから。
話してくれるまで絶対返さないから。」

α「……」
「どうしたの？言えないようなことなの？
でも、だとしたらなんでラグナには話したの？」
とことん詰め言っていくマコトにアーラはついに口を開いてしまった。
α「私は……私は、本当は……百三十を超えているんです。」
「へっ？そ、それだけ？」
それだけではただの年齢査証であった。
だが、マコトはそれだけではないと解っていた。
「っていうと思った？」
α「……この体は私の体じゃないんです。さらに言うと私は作られたただの思念体なんです。」
「……」
α「私のフルネーム知っていますよね？」
「う、うん。アーラ＝ギニョールでしょ？」
α「ええ、アーラとは私の思念体番号とでもいいましょうか、それがαなんです。そこから付けられた名前なんです。」
「じゃ、じゃあ、ギニョールって？」
α「……今から呼びます。」
「よぶ？」
アーラはギニョールと交代した。
「呼ばれて飛び出て～って、そんな雰囲気じゃありませんね。」
「変わったのかな？」
「ええ、私がα体アーラを創ったギニョールと言います。」

ギニョールは一応アーラの体のままで変わった。

「何でだましていたの？」

「だますつもりはなかったんですよ。

本当は私が表に出てもよかったのですが、私には目的があるんです。

そのためにも私自身がそのまま外に出ているといろいろとだめなんです。」

「具体的には？」

「私の目的はある人物のたくらみを阻止すること、ですがそれを相手は知っています。

なので、アーラたちに変わっていただいて私は隠れていたんです。」

「なるほどね。いろいろと事情があったんだ。」

「あら、あっさりと。」

意外と簡単にわかってくれた。

「だって、アタシだってこうやって諜報部やってるのも事情あるし。」

「そうなんですか？それじゃあ、ついでにぶっちゃけますと。

アーラのほかにもβ体のベルフ、ｏ体のオルス、ω体のウェイズがいます。

ウェイズは基本的に寝ていますが、ベルフとオルスはよくアーラと話していますから。」

「あー、なるほど、だから一人で話してたり、戦闘中に人格が変わったみたいになってたんだ。」

「そういうわけです。後さらにぶっちゃけますと、各人格ごとにちゃんと体の方を変えられるんです。

私はいろいろと不安定なのでそんなに長時間はできませんがね。」

「本当？見せて見せて。」

ギニョールやベルフ、オルスは、マコトと簡単に調和できた。
ウェイズは寝ている。
だが、この出来事がこの先あんなことになろうとは思うはずもない。

## 小手調べ、相棒だから（後書き）

こんなのでよかったですかね？
まあ、この先どうなるかは考えているので大丈夫です。
それでは

## オリキャラ紹介　（外見編）（前書き）

紹介系は更新にカウントしません。
どうぞ

## オリキャラ紹介　（外見編）

うぃ～っすＷＡＷＡＷＡ忘れも……うぉあ！
とまあ、入ってきたわけですよ。
β「どういうわけだよ。」
α「ネタがメジャーだからいいじゃないですか。」
β「そういう問題じゃねぇよ。なんでまた来たのかって話だ。」
それはタイトルでもう明かされている。
ｏ「つまり僕らの見た目の紹介だね。」
そういうこと。
「それじゃ、とっとと済ませてね。ウェイズが何するかわからないから。」
おｋ。それじゃ、行ってみよう！

ギニョール
身長－１５０センチ
金髪の尖ったツインテールに黒いローブとロップキャップをかぶっている。（ローブのフードは基本的にかぶる。）
ちょっとジト眼。
右目を眼帯をしているが決して眼が悪いわけではなく右目と体のところどころに永鵺があるため力を抑える働きをしている。
四肢には眼帯同様の包帯が巻かれている。
歳と見た目が合わずロリババアとベルフに言われたことがある。

アーラ
身長－１４０センチ
赤いストレートロングに士官学校の制服の袖を切り取って黒くしただけの服に帽子、円盤を収納するためのガントレットと具足と比較的シンプルな服装。

右目を包帯で隠している理由としてはギニョールと同じで永鵺の膨大な力を抑えるため、ガントレットと具足も収納ついでに抑えてくれる。

ベルフ
身長－１９０センチ
金髪のゆるめのオールバックにサングラス、黒いスーツに黒いジャケットとバイオハザードのウェスカーを思わせる格好だがヘッドフォン常時着用だったり性格が災いし怖いとかりりしいよりも面白いという方向に捉えられる。
ギニョールの人格はすべて右目と四肢を隠すようになっており、ベルフは右のレンズに封印術式がかかっている。

オルス
身長－１２０センチ
白髪のショートヘアに黒のペレー帽、軍服にアイパッチというぱっと見は女の子のコスプレのような格好。
ギニョールたちは黒を基準とした服を着ており、諜報部に配属されたおかげで服装を変える必要は皆無。

ウェイズ
身長１００～２００センチ
全身が黒いメタリックな人。
力が強すぎて不安定なため形を創っているのが限界。
だが、シンプルゆえに全身に封印術式がかかっているという安心設計。

こんな感じです。
「ロリババア言うな。」
α「ってかなんで大人っぽい人がいないの？」

β「おれおれ。」
何となく！簡単だったから。
o「それでいいの？」
大丈夫だ問題ない！
「さて、じゃあアーラの体使ってウェイズが寝てるからさっさと変わってやって。」
α「はーい。」
それじゃ、この辺で。
それでは～（∵）ノシ

## オリキャラ紹介　（外見編）（後書き）

いろいろとネタが満載です。
説明が足りない部分はご想像にお任せします。
それでは

## 休暇をいただきました（前書き）

なんか日常的なものが書きたくなりました。
どうぞ

## 休暇をいただきました

α「え？　休暇ですか？」
「そうそう、結構な情報を提供してくれたから今日一日休暇だって。」
α「そ、そうですか。」

ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジの任務を終えた二人は情報の整理などをするため数日の休暇をいただいたのだ。

α「とはいっても私休暇いただいてもやることないんですよ。」
「まぁそうだね。英雄だからお洒落とかしないし……じゃあさ、アタシにちょっとだけ付き合ってくれるかな？」
α「いいですよ。暇ですし。
ギニョールもいいよね。」
「いいよいいよ、時間的にもそこまで急がないし。」
「もう、普通に出てきてるね。」
「だって、アーラの体小さいんだもん。」
α「身長そんなに違いないよね？」
「ま、閑話休題（それはさておき）とりあえず後日改めて連絡取るから。」
α「了解です。」

そして後日。
マコトからの連絡が一向に来ない。

β「マコトのことだ一応約束は守るだろう。予定が変わっても連絡はよこすはずだ。」

とまぁ、噂をすればなんとやら連絡が来た。

「遅れてごめんねー。そんじゃ、とりあえずオリエントタウンの中華料理屋に来てくれるかな？」
α「了解です。」

ってなわけでオリエントタウン。
マコトいわく、今日は格安で食べ放題らしい。

α「私小食なんですけど。」
「ベルフに変われば？　あの体なら食うっしょ。」
α「いやいや、普通に変わっちゃまずいですよ。」
「だったね。」
α「ところで、なんで呼んだんです？　普通に食事もいいのですが私たちの予定を聞いてまで誘うなんて。」
呼ばれた理由が気になる。
「いやぁね、ちょっと会わせたい人がいるから。」
α「合わせたい人？」
「そうそう。お、来た来た。」
α「？」
「マコトー！」
「後輩はどんな感じ？」

マコトが呼んだのは、金髪に碧眼の少女と赤髪に蒼眼の少女であった。

「それを今から紹介するから早く席についてついて。」
「ここ食べ放題でしょ？　よーし食べるぞー！」
マコトが席に着くのを促す前に金髪の少女は席に着いていた。
α「マコト先輩。」
「ん？」

α「とりあえず落ち着かせてください。」
「ああ、ごめんね。
はい、それじゃあ静粛に！」
「「！？」」
「あり？　アタシなんか変なこと言った？」
「いや、そうじゃないけど。」
「マコトからそんな言葉が出てくるなんてねぇ。」
「うん。」
「あたしってそんなキャラだったっけ？
まぁいいや、とりあえず紹介するね。アタシの後輩のアーラ＝ギニョール准尉だよ。」
α「アーラです。よろしくお願いします。」
「私はツバキ＝ヤヨイ。第零師団の中尉をやっているわ。今は大きな仕事もないからこうやってこれたわ。」
「私はノエル＝ヴァーミリオン。第四師団の少尉です。今日はたまたま任務でカグツチに来てたからついでに来たんだ。」

赤髪の少女、金髪の少女の順に自己紹介をする。

「ついでってないさついでって。
それよりこの娘すごいんだよ。士官学校の入学試験から超とび級で順位になったんだから。」
「へー、凄ーい。術式適正とかもすごい高いんだね。」
「私は、ヤヨイ家の生まれで試験とかよくわからないけど、それってすごいことよね。」
α「まぁ、試験前にいろいろと努力しましたから。」
「へー、努力家なんだ。」
「ねー、凄いっしょ！」
「こんなできた後輩がいればマコトも鼻高だかね。」
「へっへーん。」

α「いいですね。
こういう友達……いえ、仲間がいるの。」
「アーラにもギニョールたちがいるじゃん。」
α「……そうですね。」
β（おいおい、忘れんなよ。）
「ところでさ、アーラちゃんはどんな風に戦っているの？」
α「え？」
「確かに気になるわね。ノエルならベルヴェルグ、マコトなら十字トンファ。
そんな感じにどうやって戦ってるの？」
α「私はこの円盤（スライサー）を使っています。」
「これすごいんだよ。大きくなったり、反射したりして。」
「へーすごいね。」
「あとね、この子はアークエ「先輩？」あ、ごめんごめん。」
「ん？」
α「まぁ、いくらとび級といえど私はまだ准尉。
先輩たちにはかないませんよ。」
「そう。
まぁ、自己紹介とかも終わったしとりあえず食べましょう。」
「もう食べてるよ。」
「ははっ、やっぱノエルはノエルだね。」
「うん、おいしい。」

そんなこんなで、食事を楽しんでいるところ。

「やっと見つけましたよヴァーミリオン少尉。」
「ハザマ……さん？」
「こんなところで何やってるんですか、早くキサラギ少佐を捜して帰りますよ……ってあれ？
なんでツバキ＝ヤヨイ中尉とマコト＝ナナヤ少尉、ついでにアーラ

＝ギニョール准尉まで居るんです？」
「ハザマ大尉じゃないですか。どうです？　一緒に食事でも？」
「気持ちはありがたいのですが、今はヴァーミリオン少尉と任務中なのでまたの機会に。」
「そうですか。それじゃ、のえるん、任務頑張ってね。」
「ふぇ？」
「それじゃ、行きますよ、ヴァーミリオン少尉。」
「あー、まだ残ってるー。」
「大丈夫、私たちが食べておいてあげるから。」
「あー……」
α「……気づいているよね。」
β（ああ。）
（まさかこんなに早く会えるなんてね、しかも同じ師団の大尉と来ましたね。）
α「うん、ちょっと気お付けないとね。」
「アーラ？　なんかあった？」
α「いえ、なにも。」
「それじゃ、引き続き、いったっだっきまーす！」
「ふふっ、相変わらずね。」

今いたメンバーに何かしらの情報を得たようである。

## 休暇をいただきました（後書き）

次回から仕事に戻ります。
それでは

## 任務（前書き）

アーケード風味にしてみたら長くなりました。
どうぞ

## 任務

休暇もそれなりに満喫し、任務をいただくことになった。

α「今回の任務は、機密任務らしいですね。」
β（つまり、統制機構側にも知らないやつがいると。）
α「そうなんですけど、今回は、マコト先輩もいないし。
何よりも依頼を頼んできた人が不明なんですよ。」
β（機密なんだから、そのくらいもあるだろう。）
α「そうかなぁ？」

今回は機密任務である。依頼人不明、統制機構内にもこのことを知らない人間もいる。
だが、その知らない人間が上層らしい。

o（上層に知られたくないから僕たちに頼んだってことだね。）
α「そうだね。直接指名だし。
で、その任務の指定場所が……統制機構カグツチ支部と。」
β「エエエェェェェェェェェェェェエエ！」
α「だってそうなってるんだもん。」
（まぁ、いいじゃないですか。この任務、面白くなりますよ。）
α「またでた。」

とりあえず、任務の時間まではカグツチを適当にふらつく。

stage4

α「さてと、何となく空港に来てみたけど。」
β（暇つぶしで空港とかｗｗ）
α「指名手配犯が来るかもしれないでしょ？」
ｏ（それはないと思うけどなぁ。）

任務の時間までまだまだ時間があるので覚え切れていないカグツチをまわる。
そんなところに。

「あの、すいません。統制機構の方ですよね？」
α「はい？」
「僕はカルル＝クローバーと言います。こっちは、僕の姉さん。」

呼ばれて振り向くと、マジシャンのような容姿の男の子と、人形がいた。

α「おや、ニルヴァーナじゃないですか。随分とお優しい顔つきになって。」
「姉さんを知っている。貴方、いったい何者ですか？」
α「私ですか？　私はアーラ＝ギニョール。
世界虚空情報統制機構の諜報部の准尉です。」
「そんなことは聞いていません。なぜ姉さんを知っているんですか？　姉さんとどういう関係なんですか？」
α「機神ニルヴァーナ。暗黒対戦に戦ったナインさんの作ったアークエネミーの一つ。
駆動条件は殺意となっていますが、あなたの場合は違うようですね。」
「姉さんはニルヴァーナなんかじゃない！　姉さんは姉さんのままなんだ。
今は僕と一緒に戦っているけど普段ならそんなことできない優しい

姉さんなんだ！」
（可哀想に。アーラ、少し条件を出してあげましょう）
α「わかった。では、こうしましょう。貴方が私に勝ったら貴方の姉さんがニルヴァーナと呼ばれる理由を教えてあげましょう。」

THE
WHEE
OF
FATE
IS TURNING
REB
EL1
ACT
ION

「行くよ、姉さん。」

カルルは、アーラの後ろに回り、ニルヴァーナとはさむ形になった。
α「なるほど、二人組ならではの立ち回りですね。」
β（今回はおれがやる。まだローブ脱いでないからたまには出番よこせ。）
α「了解。ペルソナチェンジ！　ベータ！」
β「さて、たまには動かないと鈍っちまう。」

ベルフは、体を反らして、カルルを見る。

「（今までに見たことない構えだけど、問題ない。）
行くよ、姉さん。フォーコ！」

ニルヴァーナの腕がドリルのように回転し、向かってくる。

β「2Bっと。」

ベルフは、背中を地面につけて回転した。

「うわ！」

体性の低さと回転という攻撃手段からカルルとニルヴァーナの両方を攻撃した。

β「今度はこっちからだ。アイアンメイデンダイブ！」

ベルフは、飛び上がり、背中から針を出してカルルに向かって飛び込む。

「姉さん！」

カルルは、自分の後ろに瞬時にニルヴァーナを召喚した。

β「何をする気だ？」

「お願い。」

β「何だとっ！」

ニルヴァーナは頭上で拍手をして衝撃波を発生させて、ベルフを迎撃した。

β「ったく、面倒だな。ラミアテイル！」

「えっ！」

ベルフのローブの下から蛇の尻尾のようなものが現れ、カルルを捕まえる。

β「おらおらおら！」

カルルを二回叩きつけて後ろに投げる。

o（ある程度わかったよ。）

β「お、どうだ？」

o（あっちの男の子の方がダメージを受けたりすると、ニルヴァーナが止まるんだね。

で、肝心の本人はマントの下にいくつかのブリキを隠してあるから気をつけて。

二人の動きを合計すると、大体二十五個くらいかな？）

β「了解！　スキュラウィップ！」

ローブの下から触手を出して、相手を突いていく。

「重い。」

β「なるほど、確かにニルヴァーナが起動しないな。」

オルスの情報を再確認して、一度距離をとりなおす。

β「だいぶあったまってきたとこだ、そろそろ出すか。」

α（いやいや、あれはやめてよ。あれを私の体でやられると困るから。）

β「なんでさ？」

α（服が再生するのはあんただけなんだって。）

β「そうだっけ？」

「……何をしているかわからないけど、注意がそれてる。

アニマ！　ヴィヴァーチェ！」

カルルは、ベルフの後ろに回り、ニルヴァーナはベルフに接近した。

β「さっきから、挟み打ちが面倒だな。少し下がるか。」

ベルフは、ニルヴァーナを飛び越えて、距離を置く。

β「面倒だからこれで終わらせるぞ。魔郷閃網陣！」

ベルフは、さまざまな触手状の体の一部をローブから出して振りまわす。

「まずい！　このままじゃ……」

カルルのガードは崩れ攻撃をもろに食らった。

β「ほら、駄目押しだ！」

「ガハッ！」

蛇のしっぽでカルルの腹を突き、気絶させた。

α「やりすぎじゃない？」

β（だな。）

α「いやいや、あんたがやったんでしょ。」

β（久々過ぎて制御が面倒だったんだよ。）

α「はぁ。」

「う……う～ん？」

α「目が覚めましたか？」

「え、ええ……」

α「さて、貴方が勝ったわけですし、貴方の姉についてお話しましょう。」
β（おい、アーラ。）
「え？　僕は確か貴方と戦って気絶したんじゃ？」
α「ええ、それは確かですが、そのあとに貴方の姉さんが私たちを倒したのですよ。」
「姉さんが？」
「……」
α（そこは通してくださいよ。）

ニルヴァーナに眼で訴えて、嘘を通す。

α「さて、貴方の姉がニルヴァーナと呼ばれている理由はですね。その人形自体がニルヴァーナであり、その駆動源かなんかに貴方の姉が使われているんですね、多分。
つまり、それを知らない方が傍から見れば事象兵器の一つアークエネミー、「機神・ニルヴァーナ」というわけです。」
「はぁ。」
「おそらく、原因はレリウス＝クローバーでしょう。あの方は統制機構の技術部で大佐をやっています。
どうにかしたければ統制機構に出向いてみてはどうでしょう？」
「わ、わかりました。」

適当に説明を終えて、カルルはどこかへ行ってしまった。

β（間違ってはいないが、いいのか？）
（いいじゃないですか、彼には彼の物語がある。その終焉は姉を戻すか、ともに命を落とすか……）

## 任務（後書き）

少しだけこんな感じで進みます。
それでは

## 「正義の味方！　バアァァァァァニングバｎ」　忍べよ！（前書き）

タイトルひどいｗｗ
かなり遅れました。
どうぞ

**「正義の味方！　バアァァァァニングバn」　忍べよ！**

α「本当に教えてよかったのかな？」
（いいんですよ、全ての生き物は自分を主人公とした物語の上に生きています。
その物語のキーキャラクターが私たちでも何の問題もないと思いますよ。）
α「そっか。」

そんなこんなで戦闘だのなんだので時間をかなり食ってしまったため、急いでカグツチ支部に向かう。

浪人街
α「あれ～？　支部どこだっけ？」
β（迷ったか。）
（あ～ららｗｗ）

派遣された支部の階層都市で迷ってしまいました。

α「こういうときは人に聞こう。」
o（まぁ、定石だよね。）
α「あそこにいる人に聞こう。」
β（……いや、やめておけ。あいつにかかわるとロクなことにならない気がする。）

そこには巨大な釘を背負った男がいた。

α「いや、でも聞かないとどうしようもないし……」
「む？　そこのお主、何か困ったことでもあったでござるか？」

α「ほら、普通の人じゃん。」
βo（……）
α「ちょっと道に迷ってしまって、此処から統制機構カグツチ支部に行くにはどうすればいいでしょう？」
「おぬし、統制機構のものか？」
男はほんの少しだけ眉をひそめて聞いた。
α「ええ、ついこの間派遣されたばかりでまだよくわからないので。」
「そうでござったか。だがお主、変な感じがするでござるな。」
α「へ？」
男はアーラに対して違和感を抱いているようだ。
「何というか、お主一人と対峙している気がしないのでござる。」
α「あーなるほど。それは多分私と戦ってみればわかりますよ。」
珍しくアーラから吹っ掛けた。
「それは、そうでござるな。」
そう言って、男も腰を落として構えた。

THE
WHEEL
OF
FATE
IS TURNING

EL1

ION

α「今回はみんなでやろうか。」

o（さんせー。）

β（ギニョールとウェイズはいいよな。）

（いいですよ。ウェイズは寝てるから除外ね。）

α「オッケ！」

「轟音雷帝獅子神萬駆！　いざ参る！」

β（うっさ！）

とてもうるさい人であった。

「先手必勝でござる！」

走って接近して、ひじおろし打ちをしてくる。

α「くっ！　重い攻撃！　でも、まだまだです！」

ガードからはじいて、その時に円盤を放つ。

「ぬぉ！　なかなか面白い攻撃をするでござるな。小手から円盤が飛び出る仕組みでござるか。」

α「まぁ、では次はこちらから行きますよ！　インパクトスライサー！」

アーラは片方の円盤を巨大化させ、萬駆のガードにあてがい後ろからたたたいた。

「スーパーバリアー！」
α「なるほど、いい勘をお持ちで。」
「あれほどの振動は普通には防げないものでござる。お主なかなかの手誰でござるな。」
β「そいつはどーも。」

会話の途中に何の宣言もなく入れ替わる。

β「じゃ、後は遠慮なく行かせてもらうぜ！　スライムボディ！」

ベルフは、体を水のように柔らかくして、萬駆にまとわりつくように動く。

「シャキッとっせんか！」
β「頂きます！」

喝を入れようと殴りかかると、そこから侵食するように包み込まれる。

β「ほら！」
「ぐふぅ！」

背中にあたるであろう場所から萬駆を後ろに吐き出すと当時に体がしっかりとした固形に戻った。

β「まだこんなとこか。もっと伸ばさないとな。」
「ま、まさかあんなことができようとは。」
o「また変わるよ。　トリックハザード！」

オルスは体の関節を外して、その間をワイヤーでつないで四肢を伸

ばした。
「こ、今度はなんでござるか？」
o「こういうこと！」
腕をしならせて鞭のように叩く。
「捕まえたでござる！　獅子神忍法超奥義！」
引き寄せた際にひじを突きたてて突進してくる。
「萬駆…活殺…大噴火！」
怒濤の攻撃から、頭をつかみ壁にたたきつけた。
o「あー、なんで僕ばっかり。」
普通に起き上がる。
「何と、この技を喰らっても耐えるとは。」
o「まぁね。あのころに受けた痛みに比べればまだまだ大丈夫だから。」
「ほう。精進しているのでござるな。」
α「そこまででもありませんよ。」
「また変わったでござるか。にしても、やりづらいでござるよ。」
α「はい？」
萬駆は急に構えを解いて話し始めた。
「いやー、なんと言うかいろいろな動きが混ざりすぎて戦いとして

やりにくいのも確かなのでござるが、何がやりづらいというと、まるで戦いを望んでいないかのような動きばっかなのが気になって仕方がないでござる。」
α「はぁ。」

こっちから吹っ掛けたのになぜかこんなことを言われたしまった。

「まぁ、とにかくお主に、いくつかの気配があることは確認下でござる。これ頭のもやもやはきれいさっぱりなくなったでござる。と言うことで、統制機構に案内してやるでござるよ。」
α「ありがとうございます。」
β（案外普通の人だったな。）
o（そうだね。）
（ですが、普通でいられるのはあと少しの間だけですよ。）

## 「正義の味方！　バアァァァァァニングバｎ」　忍べよ！（後書き）

多分次回かその次でアーケード風味は最後になるはずです。
それでは

## えいゆうから英雄へ（前書き）

最近本当に更新できてないです。
ネタがないって言うのもあるのですが、少々忙しくて。
ま、そんなことは置いといて、今回の話を読んでいただければ嬉しいです。
どうぞ

## えいゆうから英雄へ

α「ふー、やっと着いたよ。」
（まったく、自分の派遣された場所くらい覚えましょうね。）
α「いやー面目ない。」

アーラたちはやっとのことでカグツチ支部に到着した。

o「でも、誰もいないよ。」
β「あぁ、正直不自然でならないな。」

そこには人っ子一人おらず、不気味な静けさが場を包む。

（あら、あそこにジン＝キサラギがいるじゃないですか）
α「あ、本当だ。」

その中にイカルガの英雄ことジン＝キサラギが何かを待つようにひっそりと立っていた。

o（なに知てるんだろ？）
β（さぁ？　でもまぁ、誰もいない中、あいつだけってのはおかしいな。）

そうやって話しているとジンはこっちに気づいたようだ。

「誰だ貴様、なぜこんなとこにいる？」
α「はい、私は諜報部所属のアーラ＝ギニョール准尉です。此処にはとある任務できました。」

「そうか、ところで、任務とは何だ？」
α「それは、いくら英雄と言われるキサラギ少佐でもお教えすることはできません。」
「極秘か？」
α「はい。」

適当に対応しているとジンは自らの愛刀『氷剣ユキアネサ』に手をかけた。

「アーラ准尉、君の任務内容は解らないが此処にいられては僕も困るのでな、君の任務は失敗報告をしてもらおう。」
α「おや、イカルガの英雄とお手合わせできるとは光栄です。」

THE
WHEEL
OF
FATE
IS TURNING
REB
EL1
ACT
ION

「飛氷剣！」
α「はい！」

飛んできた氷の剣を円盤で砕く。

α「では、次はこっちから行きますよ！」
「くっ！」

ステップから相手の懐に入ってインパクトを入れる。

「……なかなかやるようだな。とび級は伊達じゃないってことだ。」
α「おほめにあずかり光栄です。」
β（いつまでやっている。今回はまだ打ち合わせをしていないぞ。）
α「あれ？　そうだっけ？」
（そうですよ。一応毎回打ち合わせしないと。）
α「じゃ、たまにはギニョールが出てみる？」
（えー、いいよ。）
β（いいんかい。）
α「それじゃ、行ってらっしゃい。ペルソナチェンジ、ムラクモ！」
「さて、久々の運動です。制御に注意を払わなければいけませんね。」
「……貴様、何者だ？」
「お気になさらなくて結構ですよ。私にとって貴方は前哨戦ですから。」
o（一応動きは、二十五個くらいだと思うよ。）
「了解、ありがと。」

ジンは即座に違和感を感じたがそれを軽くはぐらかし、踊るように構える。

「さ、行きますよ小さな小さな『えいゆう』さん。」
「何だと？　まあいい。倒してしまえば同じだ！」

ジンは、もうダッシュでギニョールに近づくが。

「3Cっと。」
「ぐあぁ！」
「注意が足りませんよ。その程度で英雄というのですか？」

ジンの足元から赤黒いリボンのような触手が扇風機の羽のように回って足を払った。

「貴様！」

「ほら、また頭に血が上っている。これがあれになるとは到底思えませんね。」

α（だって、あの歪みがいるから変わっても仕方がないんじゃない？）

「かもしれませんね。」

ギニョールの戦い方は決して欲張らずジンの出方を見て、ラグナの時同様、まるで試しているようだった。

「凍牙氷刃！」

「単発なんて誰も喰らってくれませんよ。」

「チッ！　イライラする奴だ！」

「はぁ。」

ギニョールは何かに絶望したように溜息をつくと、ジンの目の前にまるでワープしたかのように移動した。

「ま、まだまだ時間はあります。しっかり成長してくださいね。」

「な、何！？」

「縛…」

「がぁぁぁ！」

「くっ、まだだ！」

「貴方の出番はまだまだ先ですよ。」

ジンの溝にベルフの蛇のしっぽをたたきつける。

「ガッ！」

α（終わった？）

「ええ、それじゃ、戻りますね。」

α「ふぅ、久々に見たけどやっぱさすがだね。」

（現役の三割くらいですけどね。）

β（……恐ろしいな。）

α「さて、さっさと任務を完了させよっか。」

β（だな、流石にそろそろ飽きてきたし。）

（飽きてきたって……）

o（ま、そろそろ目的地だし、すぐ終わるんじゃない？）

そんなこんなでカグツチ最下層。

（おやおや、見慣れた景色じゃありませんか。）

α「でも、少し違うんじゃない？」

β（ここは第十三階層だから、第十三素体ν－１３－だな。）

と、そんなことを話していると先ほどと似て非になる気配を感じた。

「……貴様、何者だ。何故（なにゆえ）此処にいる。」

α「えっと、貴方はたしか、六英雄のハクメンさんでしたっけ？」

「答えろ。」

（アーラ、ちょっと変わってもらえる？）

α「あ、うん。」

「お久しぶりですね。ハクメンさん。」

「その声は、「漆黒の狂人形」か。」

「私は狂っていませんよ。」

まるで知りあいのごとく会話を始める。

「ところで、何故貴公は、斯様な所にいる？」

「目的はほぼおなじですよ。ムラクモユニットを無力化し、あいつの野望を喰いとめる。」

「そうか。だがお互い九十年の間ほとんど何もできなかったであろう。そのような状態で奴と戦えるのか？」

「なにもしていないのはあなた方だけですよ。私はあなたたちと違って歴史に残らなかったので普通に自らの力を蓄えていましたよ。ま、あの時とは違う力ですがね。」

「造魂の力か。今回はどのような魂（もの）を創った？」

「見て見ます？」

「よかろう。

我は空、我は鋼、我は刃

我は一振りの剣にてすべての「罪」を刈り取り「悪」を滅する！！

我名は「ハクメン」、推して参る！」

「では、私も久しぶりに。

私は地、全てを受け止める広大な大地。

私は玉、全てを魅了する輝きを持つ紅玉。

私は鎚、全てを砕き取り入れし鉄槌。

私は無数の撃により「全（すべて）」を砕き受け止め「和（わ）」を求めるもの。

私はシュヴァルツ＝ザ＝ギニョール調和を始めます。」

THE

WHEEL

OF

FATE I

S TURNING

REBE

L1

ON

「ズェア！」

「6C！」

ACTI

ギニョールは右腕から触手を伸ばし、ハクメンはそれを弾くように切った。

「おや？　いつもよりも弱弱しいですよ？」

「ほう、一撃で見破るとは。」

「おそらく、現役の二割ほどでしょう。」

たった一撃交えただけで、お互いの力量を図る。

「それじゃ、みなさん、頑張ってくださいね。」

β「は？　って代わってるし。」

「まずは貴様からか。その力、試させてもらう。」

β「おっけ、ラミアテイル！」

「ズェイ！」

ハクメンは力強い蛇のしっぽを鳴神で受ける。

β「オラァオラァオラァオラァ！」

「甘い！」

「ぬぉあ！」

ハクメンは、ベルフのラミアテイルを斬神で投げた。

β「さすがはギニョールと一緒に黒き獣と戦った奴だ。」

「貴様もなかなかの力だ。だが、もう少し工夫するのだな。それほどの異形の力を扱えるのであれば、多少の工夫でどうにでもなるだろう。」
β「ありがてぇ、そんじゃ、変わるわ。」
o「え、ぼく？」
「恐れるな、私に力を示してくれればい。」
o「わ、解りました。」

ベルフが変わったオルスに対して、ハクメンは寛大な心で受け入れようとした。

o「では、いきます。スチーム！」
「なかなか早いな。」
o「3C、2B、エリアル！」
「弱いぞ。」
o「……」

ハクメンはオルスの一連の動きを受けると助言を始める。

「だが、速さと距離はある。相手をかく乱させるように戦い、別のものに変わるということが望ましいだろう。」
o「は、はい！　ありがとうございます！」
「では、次のもの、出て来い。」
α「お願いしますね。」
「……来い。」

アーラになると、ハクメンは、先ほどとは違う気配を醸し出した。

α「リフレクト！」
「ズェイ！」

ハクメンは、円盤を軽く切り落とす。
α「隙ありです！　インパクト！」
「遅い！」
α「あわわ！」
「さすがは、狂人形の中の順年長、戦いの勘も研ぎ澄まされている。だが、根本的な力と速さが足りないな。」
α「そ、そうですか。」
「では、次で最後だ、出ろ。」
ω「目標を確認、戦闘を開始します。」
「……」

ウェイズを見た途端ハクメンは口を閉じた。
ω「ペダル展開。対象と模擬戦闘を目的とし、最大出力で応戦。第一フェイズを開始。」
「ズェア！」

ハクメンは、今回初めて先手を取りに来た。
ω「ユニット発射。」

ウェイズはさまざまな正多面体を発射し、その面の一つ一つからさらに小さな正多面体を生成した。
「これほどの幕を張れるか。」
ω「加速。捕縛。」
「何っ！」

多面体の壁に気を取られていたハクメンを捕獲し、多面体の壁に投げつけた。

「うがっ！」
ω「爆破。」
「ぐぉあ！」

次にウェイズはハクメンが囲まれた多面体を爆発させた。

ω「第一フェイズ終了第二フェイズ開始まで待機。」
「はいはい、終了～終了～。これ以上はお互いどうなるかわかりませんからね。」

「これほどの力があったか。」
「ま、知っていると思いますが、私は彼らの力をすべて扱えるわけです。」
「そのくらいは知っている。だが、その力正しく使えるか？」
「それは私たちが決めることではなく行った後の生き残った人々が決めることです。」
「そうだな。では、私にはまだやることがある。貴公も表の物事を終わらせて去るがいい。」
「そうですね。でも、それを終わらすのにももう少し此処にいる必要があるんですよ。」

この後に二人は現役時代の話をしたりして、お互いの来るべき時間まで時を待つことにした。

## えいゆうから英雄へ（後書き）

アーケード風味は今回で終了です。
次回から、まともに本編書きます。
それでは

## 英雄と反逆者（前書き）

ものすごく遅れました。
しかもまだ微妙にアーケード風味だし。
とりあえず、どうぞ。

## 英雄と反逆者

カグツチ最深部
「ところでギニョールよ。」
「はい？」
「貴様が受けた任務とは一体どのようなものだ？」
「ここを調べて来いとのことです。」
「何故そのようなことを？」
「さぁ？　差出人不明ですから。」
「頼まれた、相手も解らず引きうけたのか。随分と警戒心をなくしたな。」
「今までもそうでしたよ？　相手がなんであろうと受け入れることが私です。」
「ふっ、そうだったな。」

そんな他愛のない話をしていると、何かしらの気配を感じたのか、ギニョールはその場を離れた。

「さぁ、ハクメンさん。貴方の待っていた人が来ましたよ。」
「そうか。では、また会おう。」
「えぇ。」

ギニョールが立ち去ると死神と呼ばれる蒼の魔道書の所有者が現れた。

「さて、私はもう少し此処に用がありますので、少々見物せていただきますよ。」

そう言って、物陰に隠れ、息をひそめた。

「来たか……久しいな「黒き者」よ。」
「久しい？　何言ってんだ……テメェ。
俺ァ、しらねぇぞ……テメェなんか。」
「どうした？
声が震えているぞ、何をそんなに怯えている。」
「うるせぇ、黙ってろ……」
ハクメンにとっては久しい相手ではあろう。だが、ラグナにとっては初めて会う上にとてつもない既視感と恐怖が混ざり、自分がたじろいでいることすら気付かない。
「……逃げぬだけ褒めてやろう。
来い、早めに終わらせてやる。」
「なんだテメェ、偉そうに！
誰が終わりだ、このお面野郎が！」
ラグナが自身の大剣に手をかける。
「貴様……。
まあいい、どんな形であれ、貴様は滅するのみ。
我は空、我は鋼、我は刃
我は一振りの剣にてすべての罪を刈り取り悪を滅する！
刃が名はハクメン、推して参る！！」

ＴＨＥ　ＷＨＥＥＬＬ
　　ＯＦ
ＦＡＴＥ　ＩＳ　ＴＵＲＮＩＮＧ
　　ＲＥＢＥＬ１
　　ＡＣＴＩＯＮ

「どうした黒きものよ、足が震えているぞ。」
「テメェ！」
ラグナは恐怖をはねのけ、いや恐怖をごまかし、ハクメンに先手を

打った。

「甘い！」

「俺の攻撃を！？」

ラグナは、当て身を取られて驚愕している。

「ざけんなっ！　ヘルズファング！」

「蓮華！」

「ぐぁ！」

一撃目を避け、二撃目にあわせ一撃目を。残った二撃目でラグナを蹴り飛ばす。

「私を失望させるな。」

「このお面野郎が！　カーネージ・シザー！」

「虚空陣……雪風！」

「ぐぁ！　何が起こった！？」

ハクメン一瞬の居合いとともに後ろに駆け抜けた。

「……どうした、何故本気を出さん！」

ラグナは少し黙りこむと剣を地面に指して右手に力をためる。

「……しゃあねえな。使いたくなかったんだが……

第６６６拘束期間解放、次元干渉虚数方陣展開！！

うおぉぉぉぉぉ！　蒼の魔道書（ブレイブルー）……起動！！

行くぞ！　このお面野郎が！」

「ほう。」

ラグナは蒼の魔道所を起動させた、その姿にはもはや、先ほどまでの恐怖や既視感はなくただ目的のためにのみ動く武士のようだった。

「術式機関解放！」
「我が宿命に従い、貴様を滅する！　虚空陣奥義、夢幻！！」
「見せてやるよ、蒼の力を！」
「消えよ悪夢よ！」
「ブラックオンスロート！」
「ズェア！」

お互いの全力ともいえる刃が交わされる。

「やるな、黒きものよ。」
「チィッ！」

攻防の節目を迎え、お互いに距離をとる。

「！！　事象干渉か、邪魔をするな化け猫め！」
「き、消えた？　レイチェル？　じゃねぇよな。
何もんだったんだ……一体。
……膝が笑ってやがる。このまま戦っていたら危なかったぜ。」

ラグナはかすかに息を着き、そしてその直後また顔をこわばらせた。

「あぁ、そういえばあの娘に挨拶するのを忘れていましたね。
ま、今はどうでもいいでしょう。もう、蓋は空きましたから。」

## 英雄と反逆者（後書き）

もっと早く更新できるように頑張りたいです。
そのためにもできるだけ書き溜めておかないといけませんね。
それでは

## 剣と窯（前書き）

遅くなりました。
ストーリーがごっちゃになってたりなってなかったり。
まぁ、どうぞ

## 剣と窯

β「ハクメンが消えちまったな。」
α「事象干渉をくらっちゃったからね。」
「まぁいいでしょう。彼は十分な時間を稼いでくれました。」

ギニョールはいつものように（？）笑みを浮かべ結果にうんうんとうなずく。

「ＣＡＵＴＩＯＮ！！ＣＡＵＴＩＯＮ！！ＣＡＵＴＩＯＮ！！
ＵＮＩＴ　ＭＵＲＡＫＵＭＯ　Ｎｏ．１３　ＲＥＰＲＯＤＵＣＴＩＯＮ　ＰＲＯＧＲＡＭ　ＳＣＨＥＤＵＬＥ　ＥＮＤＥＤ
ＴＨＥ　ν　ＳＴＡＲＴ-ＵＰ　ＲＥＡＤＹ」
「精練が終わっちまったか。
……めんどくせえな。
めんどくせえなんてもんじゃねえな。気味が悪ぃ。」

どうやら剣の精練が終わったようだ。
唇をかみしめるラグナの前に窯から生まれたそれは、ゆっくりと目の前に降りてきた。

「起動・起動・起動・起動……全機能・正常。ムラクモ起動します。」

生まれたそれは機械的な言葉で己を確認する。
そして確認が終わった後に眼をパチリと開いた。

「あー！　ラグナ～っ！！
ゴホッゴッ……」

確認したにもかかわらず体調の悪そうなそぶりを見せる。

「ちっ。」

「ふぅ……あ、ごめんね。

でも久しぶりだね、えっとぉ……三回目だっけ？」

「三回目だ馬鹿……ん？　合ってる？　くそっ！　なんだこの違和感は？」

「ふふふ……いらっしゃい。

またニューのこと、殺しに来たの？」

「「殺しに」じゃねぇよ。

「壊しに」だ。」

「どっちでも同じことだよ。

この前なんてすっごくいたかったんだから！

いきなり切られて死ぬかと思っちゃった。」

「黙れ……」

普通じゃない会話を笑顔で話すニュー。それに対して気分の悪いラグナ。

「でもさ、ラグナ……気持ちよかったでしょう？

ニューの身体を切ったり、刺したりして……あの時、無抵抗だったニューをあれ程苛めてさ。」

「黙れ……」

「だってあの時のラグナ……」

「黙れって言ってんだよ……」

「笑ってたよ。」

「グッ……！」

「でも今日は違うよ。

ほら、ちゃんとした体ができて、お話しできるよ。

あー、でもラグナはこの前みたいな方がいいのかな？」
「テメェは！　黙れって言ってんだよ！！！
その顔で、その声で、胸クソ悪い台詞を吐くんじゃねぇ！！」
急に声を荒げるラグナ。まるで恨みや憎悪よりも言葉にならぬ因縁があるように。

「……」
「俺はテメェを壊しに来た！　それだけだ！！
話すことなんぞ、なんもねぇんだよ！」
「ふふ……ふふふふ……」
「何だよ。」
「はははは！」

急に不敵な笑いを上げるニュー。

「やっぱりラグナもニューと同じだね。うん、同じだよ！
はははははは！」
「何言ってやがる！」
「ラグナも壊したいんだよね！
ニューも自分も世界も……グチャグチャに、グチャグチャニ壊したいんだよね。
そうだよねラグナには力がある……
「蒼」の魔道初、世界と戦える力……力があるんだもん、使いたいよね、ラグナ。」
「うっ……」
「いいよ、殺りあおうラグナ。
何時までも何時までも何時までも……ふふっ。
ニューはね、ラグナの望むことなら何でもしてあげる。
だってニューはラグナのものだもん。

ラグナを満たせるのはニューだけ。
そう、ニューだけだよ。」
「テメェ……」
何かが切れたようにラグナは剣を抜いた。
「おいでラグナ……抱きしめてあげる。」

THE HEEL
OF
FATE IS TURNING
REBEL 1
ACTION

「おらぁ！」
ラグナは先手必勝と言わんばかりにさっそく攻撃をした。
「遅いよ。」
「ぐはぁ！」
「どうしちゃったの？　そんなんじゃニューは殺せないよ。」
「うるせぇ。」
後退してカウンターに剣を召喚する。
「ほぉ、この事象ではその力なんだ。」
α（質はどう？）
「とてもいいです。いろいろと楽しめそうですね。」
隠れ見ている側も結構楽しんでいる。

「今度はニューの番だよ。」
「ぐぉあ！　クソッタレ！」
後手必殺がごとくの重い攻撃がラグナに降り注ぐ。
「この程度じゃないね。ラグナにはもっともっと力があるもんね。」
「クソッ！　まだだ！」
「もう無理だよ。　消えろ、全て。」
空間を広げ、無数の剣がラグナに襲いかかる。
「……ねぇ、一緒になろう？　何も考えずに。」
「来る…な。」
ニューは徐々に近づきラグナをとらえる。
「ムラクモユニット解放次元干渉虚数方陣展開。
我が魂の気する場所に手根源に生まれいでし剣よ、すべてを無に帰する刃を我が前に示せ。
滅べ。」
「……まだだ。第６６６拘束期間解放……次元干渉虚数方陣展開！」
薄れゆく意識の中、右手にある蒼の魔道所を起動する。
「ブレイブルー起動！　うおおおぉぉぉぉぉぉ！　爆ぜろ！」
「ラグナ？　どうして解ってくれないの？　とても素敵なことなのに。」
「理解できるかよ！」
「痛いよ！」

渾身とも言うべきカーネージ・シザーがニューに炸裂する。

「まだ終わりじゃねぇぞ。　俺がテメェを壊すまでは終わらねぇ！」
「ひぐっ……いいよ、また会えるもんね。まだまだ続くもん。」
「チッ！　術式解放！　先のことをテメェに決められる筋合いなんざ無ぇんだよ！　ブラックオンスロート！　ブラックザガム、ナイトメアレイジ……デストラクション！」

ラグナは蒼の力を全て解放し破壊にかかる。

「……」
「やったか？」
「あっはははは！」

もはや虫の息のニューが高らかに笑いだす。

「やっぱり何も変わらないんだよ！　まだまだ続くんだよ！」
「クソが……」
「さぁ、一緒になろう。」

ニューはラグナを抱き、窯へと落ちてゆく。

## 剣と窯（後書き）

次回でＣＴ編は終了かな？
それでは

## コンティニュアムシフト（前書き）

前回の中途半端な状態の続きです。
どうぞ

## コンティニュアムシフト

「兄さま。」
「ん？　なんだ、サヤじゃねーか。今日は具合、いいのか？
それともなんだ、またジンにいじめられたのか？
悪いな、なんだか疲れちまってよ。すげぇ眠いんだ。」
「……」
「なんだ？　悪いよく聞こえねーわ。」
「あきらめないで。」

「手を伸ばして、早く！」
「がぁっ！」
「あぁ……」

手を伸ばしつかんだそれにラグナは引き上げられた。

「ウイルスが助かった？！　こんなこともあるものですか！」

ラグナが引き上げられると同時にギニョールの触手がニューを引き上げる。

「ふー、危ない危ない。」
「……」
「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」
「あら？　ヴァーミリオン少尉じゃないですか？」
β（ったく、何してんだか。）

ニューを助け、窯に降りたギニョールに対してラグナとノエルの視線が刺さる。

だが、ノエルはそんなこと意にも介さず、ラグナに向き合い叫びだした。

「なんなんですか貴方！　無茶しないでください！　吃驚させないでください！　本当に怖かったんですよ！　物凄く怖かったんですよ！　もう、もう私……ひっ！……馬鹿ぁ！　馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！……」

「お、おい……

なんだよ、いきなり。」

徐々に小さくなる罵声に戸惑うラグナ。

「馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！馬鹿！」

「馬鹿馬鹿言うんじゃねーよ。」

「馬鹿……」

「なんか……ごめん。

悪かったよ……よくわかんねーけど。」

「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁん！」

「何なんだよ。」

思いっきり泣きじゃくるノエル。そう思うと寝てしまった。

「スー……」

「泣き疲れて寝ちまうし……

どうしろってんだよ。」

（うーん、浮いてる？）

α（浮いてるね。）

ο（うん。）

（お暇しようか？）

場に合わずその場から立ち去ろうとした時思わぬ来客が訪れた。

「え！」

「……貴方は私に会う時いつも寝ているわね。」

「おい、ウサギ。なんなんだよ、こいつ。」

「新しい「眼」よ。」

「「眼」？なんだそりゃ？

……あーもう！

さっきから全っ然意味わかんねーんだよ！

もう少しわかるように説明できねぇのかよ！」

レイチェルの専門家のような説明を一ミリも理解できないラグナ。

「……真の「蒼」を受け継ぐ者よ。

貴方の持ってる模造品ではなくてね。」

「な……んだと？」

「……そしてこれから世界は未知の領域に入る。もう私にも解らないことが起こるわ。」

「なんですって！」

なぜかわからないことに一言に反応するギニョール。

「あらいたの？　お人形さん。

まぁいいわ。ちょっと悔しいけれど、でも楽しみね……」

「いや、楽しくねーよ。

マジ意味わかんねぇっての。」

「でもその前に、あれが来るわ。」

「あれですか。」

「二人で理解してねぇでちゃんと説明しろよ。」

「……」

説明を省いてレイチェルは消えてしまった。

「お、おい！　待てこら！
なんだってんだよ……“模造品”？
この力が？」

しけた空気の中、すやすやと眠るノエル。

「幸せそうな顔しやがって、なんだこいつ。
って言うか、似すぎだろ、どう考えても。」

そんなノエルの寝顔を眺めている時、突如大きな揺れが起こった。

「うぉっと、危ねぇ。」
「おや、巨人の一撃ですか。」
「ん、ん？」

揺れによってノエルが目覚めた。

「お、目覚めたか？」
「あれ……此処は？　……貴方は？」

ラグナの顔を見るなり、寝ぼけ眼（まなこ）だったノエルの眼が一気に目覚めた。

「！！　あなた！　ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ！！」
α「はいちょっと今は静かにしてください。」
「むぐっ！！　えっと、あなたは確か……」

α「世界虚空情報統制機構の諜報部のアーラ＝ギニョール准尉です。」
「あぁ、マコトの部下の。」
「えぇ。」

とりあえずアーラがその場を制した。

「「「！？」」」
「ハハハハハ！」

突如として響く嘲笑。

「こん時を待ってたぜぇ！　俺を見ろ……俺を見ろ！　ノエル＝ヴァーミリオン！」
「ハ、ハザマさん？」
「！！　しまっ――――ノエル！」
「その男を「観測（みる）」ては駄目！」
「え？」

急に現れてノエルにハザマを見るなというレイチェル。

「貴方、誰？」
「きひひひひ……」

さっきとは違う笑いがその男から発せられる。

「ははははっ！　認識したな貴様。
おいクソ吸血鬼！　やったぞコラ！」

その男の髪は逆立ち、常に狐のように閉じていた目が肉食鳥のよう

に鋭く光る。

「テメェは！」

「おいおい危ねーなぁ。なんだよ～。」

その男を見るなり、ラグナは血相を変えて飛びかかる。

「二人がかりなんて卑怯じゃん。大人げないじゃん。

駄目、駄目駄目駄目よ！　まぁ、どうしてもって言うなら相手してあげちゃうけどね。

ちょうどいい準備体操にもなりそうだしー。」

その視線の先をみると、レイチェルは吸血鬼本来の殺気を放っていた。

「テメェ……」

「久しぶりじゃん、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ。右腕はお元気？

……あぁ、ごめんごめん、俺がぶった切っちゃったんだっけ？

どうよ？　その作りもんの腕、なかなか便利なんじゃね？　模造品の割にはイケてなくなくない？」

「コンの……クソ野郎が！！！！」

「やめなさいラグナ！」

「ウサギ！邪魔すんな！！！！

挑発に軽々と載せられ、飛び込みかけたラグナを止めるレイチェル。

「悔しいけど事象が変わったのよ……

今の貴方じゃ万に一つの勝ち目もないわ……」

「そうそうそういうことよぉ！

今、俺様のお遊びに付きあえるのはそこのクソ吸血鬼くらいじゃな

いかなぁ～？
テメェみてーな小僧じゃはっきり言って役不足なんだっての。
？　アレ？　役不足って使い方間違ってたっけ？　ま、いーか。どっちでも。キヒヒヒヒヒ！」

レイチェルの忠告に便乗するテルミ。

「テメェ！
やってやろうじゃねーか！かかってこいよクソ野郎！！」
「イキがるなって子犬ちゃんよ。
あんまキャンキャン吠えるとマジ殺すぞ。」
「あら？　粋がっているのは貴女の方じゃなくて？
……”坊や”」

殺気を放ちながらテルミに一声かけるレイチェル。

「冗談冗談、やっべー、マジこえー。
いやー良かったねーラグナ君。
優しい保護者についててもらって。」
「んだと、テメェ！」
「だからやめなさい、ラグナ！」

気を抜けば今にもとびかかりそうなラグナをおさめるレイチェル。

「ま、俺、今日は超ゴキゲンだし、子犬ちゃんは見逃してやんよ。
怖～い人が三人がかりじゃ俺もきついしさー。
あ、二人と一匹か！　ウヒャヒャヒャヒャヒャ！
うんじゃ、また遊ぼうぜ、クソ吸血鬼。
おっさんによろしくな～。」
「おい！　待ちやがれテメェ！」

テルミはその言葉を最後に消えていった。

（私たちには気づいていなかったようですね。）

β（なんで奴を倒しに行かなかった？　今のやつは目覚めたとはいえ、まだ間もない。俺等の力ならなんとか……）

（何を言っているんですか？　彼を倒すチャンスはこれからいくらでもある。でも、あれを手に入れるのはおそらく今しかない。）

α（そういうことだから。とりあえずこのままね。）

β（クソッ！）

（後それとベルフ、貴方は姿を変えておいてください。この先、あなたのその力が必要になります。）

β（お前だってできるくせに。）

（まあね）

テルミは、此処にギニョールがいることに気づいてなかったようだ。認識としてはマコトの部下がなぜいるのか疑問に持っているくらいだ。

「なに、あの人、なんなの？　なに？　なんなの？」

今のすべての出来事に無限の疑問符と恐怖を浮かべるノエル。

「クソッ！」

逃がしたことに悔しさを隠せないラグナ。

「おい、大丈夫か、アンタ。

え～と、ノエルだっけか？

おい！　しっかりしろ！　おい！　ノエル！」
「漆黒の……スサノヲ……」
何かの暗号のような言葉をノエルはつぶやく。
「……ココノエ、見てたわね。」
「あぁ、待ちに待ったぞ。この時を。
ヤツは、私が必ずこの世存在ごと消し去ってやる。
必ずだ！」
無機質な音に乗せられた執念に満ちた声が響く。
（あの子もそろそろ動いてきますか。じゃ、彼もいなくなったことですし、変わってください。）
α（わかった。）
「さて、お人形さん。一つ聞きたいのだけど？」
「なんです？」
「貴方、何故あそこで身を隠したの？　歴史に記されなかったとはいえ、最強の英雄。
貴方ならあの坊やを倒せたのではなくて？　そして傍らにいる第十三素体。」
「確かに、私は一度最強の英雄と言われた。漆黒の狂人形と、そして千変の人形とも。
だが、私が今なせるのは頑張って５０ちょっと。昔には程遠い。
そして、傍らにいるこの子は、私の糧となる。」
「なるほどね。」
質問にも動じずに返し、説明を終えたギニョールにラグナの視線が突き刺さる。

「おい、テメェ。なんで（それ）を助けた？」
「なんでって、今言いませんでした？　この子は私の糧となる。あぁ、後それとあの時頼んだ十二素体の破壊はもういいです。むしろこれからは貴方は何もしないでください。もう昔のことは忘れて貴方なりの生き方をしてください。」
「はぁ？　テメェふざけてんのか？」
「ふざけていませんよ。それが私にとって合理的であり、なおかつ彼を倒すのが楽になる。」
「ラグナにこの剣から抜けてもらうのは私も賛成だわ。でも、彼女を放っておいてほしいってのはどういうこと？」
「それはいいかねますね。おそらく言えば、貴方達を敵に回す上に自ら滅びかねませんから。」
「そう、まあいいわ。貴女は貴女なりにやりなさい。そしてラグナ。彼女の言ったようにもう手を引きなさい。後は私たちがやるから。」
「ふざけんじゃねぇ！」
「ま、最初からそういうとは思っていましたけどね。」
「そうね。それじゃ私たちは去りましょう。」
「そうしますか。」
「ちょっと待ってください！」

レイチェルとギニョールがその場を去ろうとした時、ある声が二人を引きとめる。

「なんですか？　ノエル＝ヴァーミリオン。」
「貴方達は、どこまで知っているのですか？　まるですべてを見据えてるように話して、まるで未来を知っているように退屈そうで。」
「私がわかっているのは「今（ここ）」までよ。後はわからない。」
「私は控えさせていただきます。知りすぎるのもよくないですから。」

「……解りました。」
「では、失礼するその前に。……いただきます。」
「「「！」」」
ギニョールは三人が見ている目の前でν－１３－をローブの下に引き込み、飲み込んだ。
その時のニュ－１３－の表情は快楽におぼれるようだった。
「さて、では改めて失礼しますね。」
ギニョールはまるで霧のようにふわふわと消えていった。
「何だ、今のは。」
「……」
「……ふふっ、なるほどね。」
「なんか解ったんですか？」
「なに、簡単なことよ。彼女はより強大な力を取り込むことにより、己の力を増やす。
そのためにあの第十三素体を糧として取り込んだ。」
「強大な力を取り込む？　だとしたらなんで俺を狙わない、俺の蒼の魔道所は咎追いやそうでないやつもこれを狙って俺に向かってくる。なのになんで奴はおれを狙わない？」
「さあ、それは私の知ることじゃないわ。ただ模倣品だから取り込めないのか。はたまた特定の力しか取り入れられないのか。」

## コンティニュアムシフト（後書き）

ＣＴ編が終了いたしました。
さて、タイトル通り次回からＣＳ編です。
それでは

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3306p/

BLAZBLUE～七人目の六英雄～

2011年11月4日14時14分発行